

2017年 本屋大賞受賞作の紹介

2017年 本屋大賞が発表されました。

本屋大賞とは“売り場からベストセラー”をモットーに、全国の書店員が自分で読んで「面白かった」、「お客様にも薦めたい」、「自分の店で売りたい」と思った本を選び、投票して決める賞です。

本好きが注目する旬の本をあなたも読んでみませんか？

☆マークのある本は図書館にもあります。



☆大賞

『蜜蜂と遠雷』 恩田陸 幻冬舎

私はまだ、音楽の神様に愛されているだろうか？

数多の天才たちが繰り広げる競争という名の自らの闘い。

ピアノコンクールを舞台に人間の才能と運命、そして音楽を描き切った青春群像小説。



6位

『暗幕のゲルニカ』 原田マハ 新潮社

反戦のシンボルにして20世紀を代表する絵画、ピカソの“ゲルニカ”。

国連本部のロビーに飾られていたこの名画のタペストリーが、2003年のある日、忽然と姿を消した…。

大戦前夜のパリと現代のNY、スペインが交錯する、華麗でスリリングな美術小説。



☆2位

『みかづき』 森絵都 集英社

昭和36年、学校教育に不信を抱く千明から学習塾の立ち上げに誘われ、吾郎の波瀾の教育者人生が幕を開ける。

昭和～平成の塾業界を舞台に、三世代にわたり奮闘する大島家を描いた感動巨編。



☆7位

『i』 西加奈子 ポプラ社

「この世界にアイは存在しません。」入学式の翌日、数学教師は言った。

ひとりだけ、え、と声を出した。ワイルド曾田アイ。

その言葉は、アイに衝撃を与え、彼女の胸に居座り続けることになる。ある「奇跡」が起こるまでは…。

「アイ」とは何か？



☆3位

『罪の声』 塩田武士 講談社

京都でテラーを営む菅根俊也は、ある日父の遺品の中からカセットテープと黒革のノートを見つける。

ノートには英文に混じって製菓メーカーの「ギンガ」と「萬堂」の文字。テープを再生すると、自分の幼いころの声が聞こえてくる。

それは、31年前に発生して未解決のままの「ギンガ事件」で恐喝に使われた録音テープの音声とまったく同じものだった。



☆8位

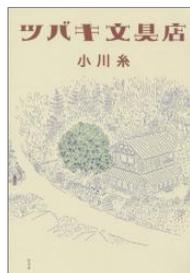
『夜行』 森見登美彦 小学館

私たち六人は、京都で学生時代を過ごした仲間だった。

10年前、鞍馬の火祭りを訪れた私たちの前から、長谷川さんは突然姿を消した。10年ぶりに鞍馬に集まったのは、おそらく皆、もう一度彼女に会いたかったからだ。

夜が更けるなか、それぞれが旅先で出会った不思議な体験を語り出す。私たちは全員、岸田道生という画家が描いた「夜行」という絵と出会っていた。

旅の夜の怪談に、青春小説、ファンタジーの要素を織り込んだ最高傑作。

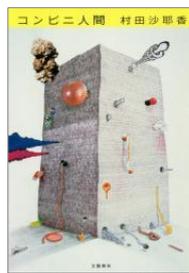


☆4位

『ツバキ文具店』 小川糸 幻冬舎

ラブレター、絶縁状、天国からの手紙…。鎌倉で代書屋を営む鳩子の元には、今日も風変わりな依頼が舞い込む。

伝えられなかった大切な人への想い。あなたに代わって、お届けします。



☆9位

『コンビニ人間』 村田沙耶香 文藝春秋

36歳未婚、古倉恵子。コンビニ勤務18年目。コンビニこそが、私を世界の正常な部品にしてくれる…。

「普通」とは何か。現代の実存を軽やかに問う衝撃作。



☆5位

『桜風堂ものがたり』

村山早紀 PHP 研究所

万引き事件がきっかけで、長年勤めた書店を辞めることになった青年。

しかし、ある町で訪れた書店で、彼に思いがけない出会いが…。

田舎町の書店の心温まる奇跡。



☆10位

『コーヒーが冷めないうちに』

川口俊和 サンマーク出版

とある喫茶店のある座席には不思議な都市伝説があった。

その席に座ると、望んだとおりの時間に戻れるという。

ただし、そこにはめんどくさいルールがあった…。

過去に戻れる喫茶店で起こった、心温まる4つの奇跡。